

# 気軽に愉しむ 大人の船旅



海の青が藍色に変わっていく。そこへ夕陽が茜色に染める。大阪・南港を出港した「さんふらわあさつま」は、関西国際空港を横目に見ながら友ヶ島沖へ差し掛かった。甲板には多くの乗船客が出て、その風景を独占したかのように思えること。波の静けさと黄昏どきの美しさが風景の中の孤独を演出してくれている。

鹿児島へ旅立とうと計画したのは、数日前のことだ。仕事に一区切りをつけて船で行くことにした。九州へのルートは、飛行機もあれば、新幹線もある。車で行きたければ、高速道路をひた走る手もあるわけだ。それでも船旅を選んだのは、時の流れをゆっくりと進めたかったのと、仕事で疲れた身体を休めたかったからである。人生のうちで、お金と暇があれば、豪華クルーズで海外に行つてみたい。そんなことを常々考えておきながら、まだまだ働き盛りの我が身は、その域まで達していない。かといって最近流行りの豪華列車の旅は荷が重い。かなりの出費が強いられるからだ。そんな時に飛び込んできたのが「カジュアルクルーズ」なるフレーズであった。それ

を実践している「フェリーさんふらわあ」は、時代にマッチした船旅を薦めている。かつてフェリーは、車を運ぶ手段として主に用いられ、広間で雑魚寝の印象が強かつた。ところが今は、個室を取つて快適な旅を楽しむ、そんなニーズが高まっていると聞く。それなら私も九州へのルートは、カジュアルクルーズをと考えたとておかしくはない。

株式会社フェリーさんふらわあ旅客営業部営業企画室の仲村啓人さんの話では、最初に埋まるのがファーストシングルで、気兼ねすることなしに一人旅を楽しもうと、一人用の個室から売れていくそうだ。一人でもツインの部屋を押さえたい向きはいかなくとも、デラックスBを取つてゆつたりと使う人が多いという。かくいう私もそのうちの一人。ファーストシングルが取れなかつたのでデラックスBをシングル利用することにした。

たまたま夕食で隣りに座った濱田一家さんは、親子5人で車にて乗船。出身地・長島町へ里帰りのルートを海上に取つた。「4歳、2歳、0歳と子供が小さいのでゆっくりできるフェリーがベスト。3年ぶりの里帰りですが、孫を見せてあげるのが楽しみで…」と話している。濱田さんは夜勤明けの疲れた身体で旅に出た。「フェリーな